

9011

日本建築学会大会学術講演梗概集  
(東海) 1994年9月

## 川端康成の作品に見る建築空間

○正会員 鈴木 雄一郎<sup>\*1</sup>  
 同 張 夷文<sup>\*2</sup>  
 同 近藤 正一<sup>\*3</sup>  
 同 若山 滋<sup>\*4</sup>

**【序論】**1968年にノーベル賞を授賞した川端康成は、大正・昭和という日本が急激に変化した時代に生きた我国を代表する文学者であり、その文筆活動において日本が進歩と引換に失いつつあった日本の伝統的な美を追求してきた。本研究では、川端康成の代表的な4作品を取り上げ、そこに現われる建築と都市空間を分析し、日本の美に関する感性の典型を通して、近現代日本人の空間意識を明らかにすることを目的とする。

**【研究対象・方法】**川端康成の代表的な作品である戦前の「伊豆の踊子」「雪国」と戦後の「古都」「山の音」を研究対象とし、以下の考察を行う。1) 作品の中に出現する建築・都市空間に関する用語を建築用語として抽出し、建物、部屋、部位、建具・部材、家具、庭、都市施設、地名、国名、交通機関、その他に分類して、それらの頻度と傾向について考察する。2) 作品の舞台となる空間の文章量(文字数)を作者及び読者の意識時間として集計し、舞台推移とその意識特徴を考察する。3) 建築と都市に関する空間表現を抽出し、作者の空間意識を考察する。

**【建築用語の頻度】**建築用語の分類別構成比(図-1)を見ると、頻度の高い用語は建物、部屋、家具、地名である。また抽出された建築用語の4作品合計のうち頻度の高いものを示す表-2を見ると、建物では「家」「うち」が多く、だいたいにおいて古くて静かな建物を描いている。部屋では「茶の間」「座敷」、縁側と兼用になった「廊下」など日本の伝統的なプランを描いており、逆に「応接間」などの西洋間はほとんど現れない。交通機関はどの作品でも主人公にとっての<日常>と<非日常>を結ぶ橋渡しとして使われている。彼の描く主人公達の<日常>とは、川端自身もそうであるが、ある社会的地位を持つ人々の身近な生活空間であるのに対して、その<非日常>とは、常に貧しい所、時代に取り残されたより日本的な所である。地名でも、日本的でそし

表-1 川端康成年譜

年代	歳	川端康成	社会一般
1899		大阪で生まれる	
1914	15	肉親を全て失う	第一次世界大戦 (-1918)
1917	18	第一高等学校入学	
1920	21	東京帝国大学文学部入学	
1921	22	*「招魂祭一景」	
1923			関東大震災
1924	25	東京帝国大学卒業	
1925	26	*「十六歳の日記」	
1926	27	*「伊豆の踊子」	
1929	30	*「浅草紅団」	
1931	32	*「水晶幻想」	
1933	34	*「禽獸」「末期の眼」	満州事変 日本国際連盟脱退
1935	36	*「雪国」	
1937	38	*「雪国」刊行	日華事変 太平洋戦争 (-1945)
1941			
1946	47	鎌倉へ引っ越し *「あとがき『瀧影自命』」	
1949	50	*「千羽鶴」「山の音」	
1951	52	*「舞姫」「名人」	
1952	53	*「千羽鶴」刊行	
1954	55	睡眠薬の使用が多くなる *「山の音」刊行	
1961	62	*「古都」「眠れる美女」	
1964	65	*「片腕」	
1968	69	ノーベル文学賞授賞	東京オリンピック
1971	72	ガス自殺	

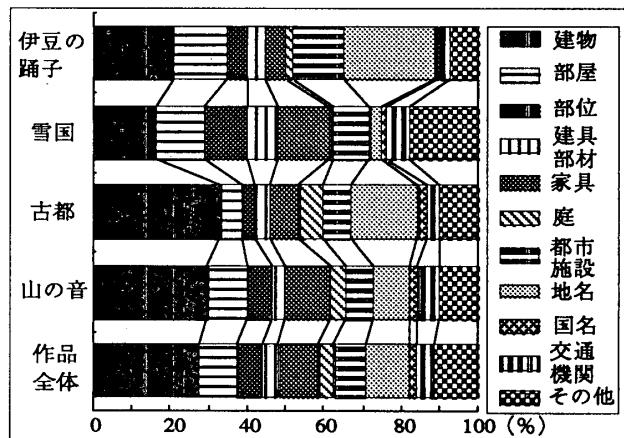


图-1 建筑用语的分類別構成比

表-2 頻度の高い建築用語

建物	回数	部屋	回数	部位	回数	建具・部材	回数	家具	回数	庭	回数	都市施設	回数	地名	回数	国名	回数	交通機関	回数	その他	回数
家	215	部屋	91	窓	71	疊	21	鏡	43	庭	70	道	38	東京	61	アメリカ	17	電車	51	村	62
うち	175	廊下	47	屋根	33	雨戸	19	電話	40	池	23	駅	27	京	30	日本	16	汽車	41	町	42
店	138	座敷	40	門	26	襖	13	寝床	29	灯籠	8	植物園	21	嵯峨	22	西洋	7	車	33	奥	39
会社	63	台所	33	壁	22	格子	13	机	28	境内	6	街道	16	京都	22	朝鮮	5	バス	11	二階	31
宿	51	玄関	29	軒	17	障子	12	枕	26	飛び石	6	橋	15	鎌倉	19	外国	5	横須賀線	8	田舎	25

Architectural space in Yasunari Kawabata's works

SUZUKI Yuichiroh, ZHANG Yiwen, KONDO Shoichi, WAKAYAMA Shigeru

て時代に取り残された場所が多く注目されている。

【舞台の推移】4作品の舞台推移に共通することは、いずれの作品も裕福な身分である主人公が、彼らにとって<非日常>の世界へ出かけるという図式である。「伊豆の踊子」はその<非日常>世界へ出かけた部分を取り上げた小説である。<非日常>世界とは「雪国」における駒子の家や村全体であったり、或いは「山の音」における絹子の家など全て古く、そして日本のでありまた貧しい所である。それらは自宅に比べて舞台推移の時間は短いものの、作品中で強い印象を与える空間である。これらの傾向は、川端自身の性格と決して無関係ではない。

【建築表現】川端作品に表れる建築空間は日本的なものが多いが、その表現は多様である。ここでは各作品における主要舞台に関する表現からその空間を特徴づけるキーワードを抜き出し、そこから得られる意識構造図を作成した(図-4、図-5はその一例である)。建築表現は光に関する表現が多く、「明るい」と言った場合は広々として豊かな生活空間を指すのに対し、「暗い」場合は狭く貧しい生活空間と結び付いている。「暗い」場合は音や匂いにも敏感になり、川端の空間に対する感覚

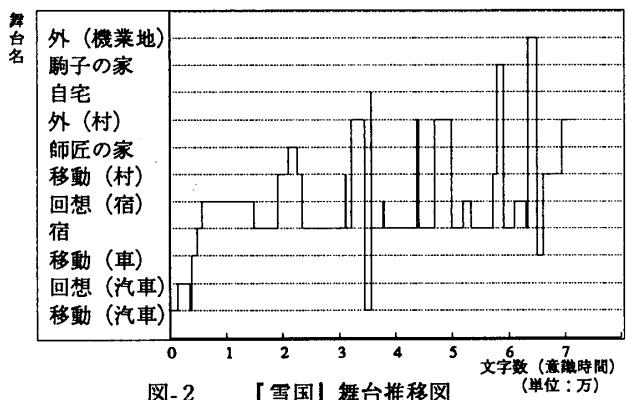


図-2 「雪国」舞台推移図

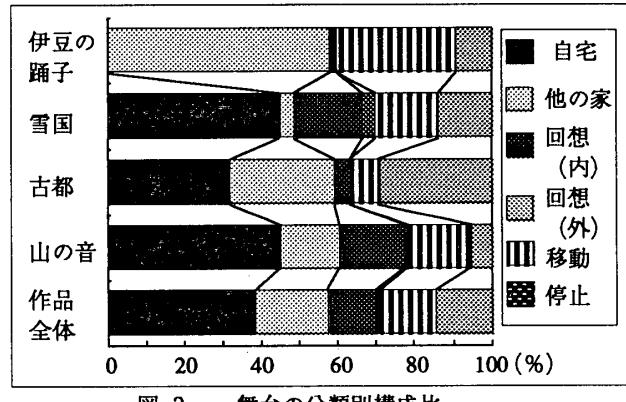


図-3 舞台の分類別構成比

\*1 名古屋工業大学大学院博士前期課程

\*2 名古屋工業大学大学院博士後期課程・修士(工学)

\*3 名古屋工業大学助手・修士(工学)

\*4 名古屋工業大学教授・工学博士

が研ぎ澄まされていくのが分かる。これら4作品の意識構造図から作品中において「好ましい」と思われる空間と「好ましくない」と思われる空間を読み取ることができる。大別すると「好ましい」空間のイメージは「和風」「古い」であり、「好ましくない」空間のイメージは「洋風」「新しい」である。しかし、「古い」と言っても、「汚ない」空間は好ましくない。

【結論】川端康成は戦後「敗戦後の私は日本古来の悲しみに帰つてゆくばかりである。」という有名な一説を残したが、その言葉の示す様に彼の作品に現れる建築空間は日本的なものが多く、それが主人公そして川端自身の<非日常>的な空間への憧憬と密接に結びついている。彼の意識していた空間とは、「古くても綺麗」な和風空間であり、言い換えればそれは日本の発展と引き替えに滅びゆく空間であった。しかしその方、「トンネル」「電車」など当時世間で最も新しい風俗も現れており彼の作品は大衆性も合わせ持っていた。結局、川端の小説とは“風俗性”と彼の目指した“日本の美”という相反するもの微妙なバランスが確実に進歩を重ねる我々日本人の心に一種の共感を呼び起こした作品なのである。

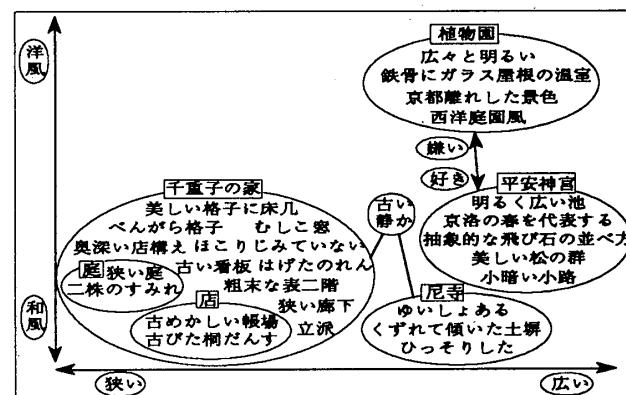


図-4 「古都」舞台空間意識構造図 建築編

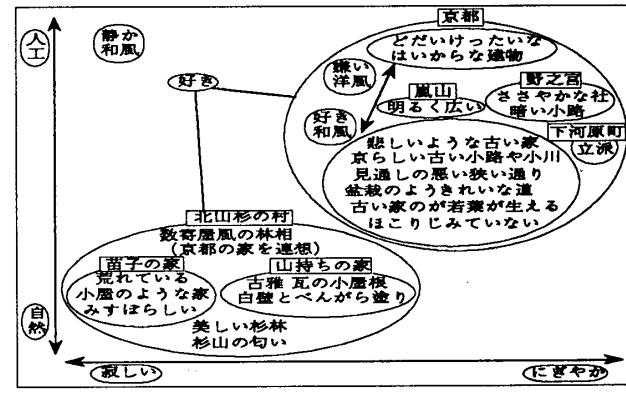


図-5 「古都」舞台空間意識構造図 都市編

Master's course, Nagoya Institute of Technology

Dr.'s course, Nagoya Institute of Technology, Master Eng.

Asst., Nagoya Institute of Technology, Master Eng.

Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.